様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：２７６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０５７０

研究課題名（和文）主節以外の文要素の左右周辺部構造と文法現象についての研究

研究課題名（英文）A study on the left and right peripheries in non-main clauses and related grammatical phenomena

研究代表者
福田　稔（Fukuda, Minoru）

宮崎公立大学・人文学部・教授

研究者番号：００２２８９１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では以下の2つのトピックに関して研究を行い、論文発表や学会発表などの活動を行った。(1)「従属節の左右の周辺部について」従属節の左右の周辺部構造の分析を行った。具体的には、従属節からの左方移動、従属節における焦点化と話題化、従属節での右方移動に関する分析を行った。(2)「句の左右の周辺部について」節構造以外の句構造における左右の周辺部構造の分析を行った。例えば、左周辺部の構造分析が名詞句にも適用できるという仮説の検証と精密化と、名詞句以外の例えば前置詞句などにおける左周辺部の構造分析の可能性を示した。

研究成果の概要（英文）：The results of our study can be summarized as follows. First, assuming Rizzi's (1997) cartographic analysis of left peripheries, we have proposed a new analysis of the left and right peripheries of main and subordinate clauses as well as lower categories such as vP in English and Japanese. Second, we have examined right movement phenomena (e.g. extraposition in English) to indicate that Chomsky's (2013, 2015) labeling theory can be applied to the analysis of the right peripheries in English. Third, under the assumption that Rizzi's (1997) cartographic analysis is applicable to non-sentential categories such as nominal phrases (i.e. DPs) and prepositional phrases (i.e. PPs), we have pointed out, for example, that some DPs and PPs show clausal properties. We have investigated into the Kumamoto dialect of Japanese and the historical change of English to indicate that the relevant facts are explicable in terms of our new analysis.

研究分野：言語学、英語学、文法、統語論

キーワード：周辺部　カートグラフィー　ミニマリスト・プログラム　話題化　焦点化　ラベル　右方移動　前置詞句

１．研究開始当初の背景

近年の生成文法における節の構造研究において、談話に関わる概念を構造位置と関係付けた Rizzi (1997) の詳細な節構造分析(Cartography)が重要な役割を果たしている。その研究対象は主節の左周辺部(Left Periphery)であるが、本研究では主節以外の文要素（従属節、名詞句、前置詞句など）の左右の周辺部構造の分析を行う。そして、周辺部構造に関わる文法現象（WH 移動、右方移動、話題・焦点化、随伴移動など）との関連を明らかにし、統語構造分析の精密化と一般性を高めることを目的とする。具体的な研究トピックとしては、(1)従属節の左右の周辺部と、(2)句の左右の周辺部の 2 つとした。

(1) 従属節の左右の周辺部について
(a)「従属節からの左方移動」　従属節からの左方移動で極めて重要なのが that 痕跡効果である。これは、従属節が補文標識 that に導かれる場合は従属節の主語は移動できないという現象である。これを Rizzi (2006) は基準凍結(Criterial Freezing)という条件で説明しているが、that と主語の間に副詞句などが介在すると移動が可能になるという副詞効果が指摘されている(Culicover (1991))。従属節の左周辺部に着目した分析と、that 節以外の種類の従属節の分析を行う必要がある。
(b)「従属節における焦点化と話題化」　主節においては焦点化や話題化された要素の種類や語順に応じて解釈に違いが生じる。この事実は主節の左周辺部構造との関連で説明できるという先行研究がある。しかし、様々な種類の従属節においても同様の事実が生じるのかという実証的な研究や、左周辺部に着目した理論的説明は遅れている。また、かき混ぜという移動現象が従属節で生じる仕組みと、焦点化や話題化との相違点を解き明かすことも必要である。
(c)「従属節での右方移動」　右方移動ついては、ミニマリスト・プログラム以前には多くの分析・提案が見受けられた(Rochemont and Culicover (1990), Takami (1992))。日本語に関しては、Saito (2010)や Ueda (2009)の右周辺部構造についての分析がある程度で、英語に関しては包括的な研究が遅れている。まず、主節で生じる(外置などの)右方移動と右周辺部の構造位置との関係を明らかにし、それを基にして様々な種類の従属節における右方移動と右周辺部の詳細な分析を行う必要がある。

(2) 句の左右の周辺部について
(a)「名詞句」　左周辺部の構造分析が名詞句に適用できるという仮説のもとで(Aboh et al.(2010))、英語や日本語での名詞句内部での WH 句の移動(Hendrick (1990), Kubo (1989))、名詞句の定性・特定性の解釈と移動現象との関係(増冨 (2013))、焦点解釈(Endo (2007))をどのように説明するかという課題がある。
(b)「前置詞句・形容詞句・副詞句」　前置詞句の内部構造については、Comp 位置があるという分析(Riemsdijk (1978))や p*P フェイズ分析(Matsubara (2000))などの構造分析が独立して提案されているが、前置詞句に節構造に対応する左周辺部があるという仮説のもとで分析をした研究はない。また、形容詞句と副詞句の内部構造については Jackendoff (1977)が詳細な分析をしたが、最近の統語分析では研究が遅れている。

２．研究の目的

(1) 従属節の左右の周辺部について
(a) 従属節にも左周辺部構造があるという仮説のもとで、that 痕跡効果を説明する。また、異なる種類の従属節からの移動現象を分析し、従属節の構造分析を精密化する。
(b) 従属節において焦点化・話題化・かき混ぜが適用した事例を比較検討し、語順や解釈の相違点を説明する。同様の規則が適用した主節の事例と比較することで、従属節の左周辺部の特性を明らかにする。
(c) 重名詞句転移、外置、右方焦点化などの操作で右方移動した要素の着陸地点を明らかにすることで、主節と従属節の右周辺部の共通点と相違点を明らかにする。

(2) 句の左右の周辺部について
(a) 名詞句にも左周辺部があるという仮説により、英語や日本語での名詞句内部で WH 移動が生じる仕組みの解明、名詞句の定性・特定性・焦点の解釈と移動現象との関係の説明をする。
(b) 名詞句で後置修飾をする過去分詞、前置詞句、関係詞節、同格節の構造位置を詳細に分析し、名詞句の右周辺部を明らかにする。
(c) 前置詞句・形容詞句・副詞句に左右の周辺部が存在するか否か明らかにする。存在する場合はその仮説を支持する事例を整理する。

３．研究の方法

研究目的を確実に達成するために研究活動を次の４つに分類し、年度毎の研究目的と活動内容を明確にした。(1)基本文献の収集と独自の調査による資料収集、(2)研究会開催、(3)学会での発表・ワークショップ開催や論文執筆・投稿による研究成果の公表、(4)研究成果の最終報告書の作成。
また、研究上の責任を明らかにするためだけでなく、円滑に研究計画を遂行するために、研究テーマ毎に研究リーダーを決めた。まず、全体的な研究進行の調整は代表者・福田が行った。次に、「従属節の左右の周辺部について」の「従属節からの左方移動」は分担者・北峯が研究リーダー（平成 28 年 12 月に分担者・北峯が死去したため、その後は代表者・

福田が交代した)、「従属節における焦点化と話題化」は分担者・中村が研究リーダー、「従属節での右方移動」は分担者・古川がリーダーとなった。「句の左右の周辺部について」は代表者・福田が研究リーダーとなった。

研究会の開催と打ち合わせ等の実績は下記の通りである。

平成 26 年度は下記の期日と場所で研究会を開催した。平成 26 年 7 月 5 日 福岡市（福岡工業大学)、平成 27 年 3 月 6 日、福岡市（福岡工業大学)。また、平成 26 年 7 月に神戸市で開催された甲南英文学会では代表者の福田と分担者の古川と北峯が集い、打ち合わせをした。平成 26 年 11 月に東京都で開催された日本英語学会では代表者の福田と分担者の古川と中村が集い、打ち合わせをした。

平成 27 年度は下記の期日と場所で研究会を開催した。平成 27 年 7 月 4 日 福岡市（福岡工業大学)、平成 28 年 3 月 10 日、福岡市（福岡工業大学)。また、平成 27 年 5 月に東京都で開催された日本英文学会に代表者の福田と分担者の古川が参加し、情報収集と打ち合わせを行った。平成 27 年 7 月 11 日に第 31 回甲南英文学会でワークショップ「周辺構造を巡って」を開催し、代表者の福田と分担者の古川・北峯・中村（代読）が発表をした。

平成 28 年度は下記の期日と場所で研究会を開催した。平成 28 年 5 月 28 日 福岡市（福岡工業大学)、平成 28 年 9 月 8 日、福岡市（福岡工業大学)。また、代表者の福田は平成 28 年 5 月 21 日、6 月 18 日、平成 29 年 1 月 28 日に福岡統語論研究会に参加し、発表と情報収集を行った。また、分担者の古川と打ち合わせを行った。

平成 29 年度は下記の期日と場所で研究会を開催した。平成 29 年 4 月 15 日 福岡市（福岡工業大学)、平成 29 年 9 月 14 日、福岡市（福岡工業大学)。また、代表者の福田、分担者の中村、古川は平成 29 年 5 月に静岡大学で開催された日本英文学会第 89 回全国大会に参加し、情報収集と打ち合わせを行った。平成 30 年 3 月には本研究の概要をまとめた冊子体の研究成果報告書を印刷製本した。

４．研究成果

(1) 従属節の左右の周辺部について

(a) 従属節にも TopP や FocP などの左周辺部構造があるという仮説と、Chomsky (2013, 2015)のラベル理論を仮定して、フェイズ性の継承に着目し that 痕跡効果や副詞効果を説明することが可能であるという提案を行った。また、if 節、whether 節、現在分詞節、付加詞節も扱いながら説明が可能であると論じた。また、付加詞として機能する現在分詞節からの移動が可能であるという事例は、時制節との左周辺部の構造的な違いに起因していることも明らかにした。結果として、従属節の構造分析を精密化することが可能となった。次の「５．主な発表論文等」の関連する雑誌論文の番号は[1], [8], [9]である。

(b) 焦点化・話題化・かき混ぜの事例を検証することで、従属節や、主節の下位構造 vP においても左周辺部構造があるという仮説が正しいことが確認された。「５．主な発表論文等」の関連する雑誌論文の番号は[6]である。

(c) Chomsky (2013, 2015)のラベル理論を前提として、外置に代表される右方移動の派生や要素の着陸地点を検討した。また、日本語の法助動詞が生起する右周辺部構造での順序を、法助動詞の種類毎の語彙特性から導くことが可能であると論じた。「５．主な発表論文等」の関連する雑誌論文の番号は[3], [4]である。

(2) 句の左右の周辺部について

(a) 名詞句にも左周辺部があるという仮説のもとで、日本語の熊本方言の属格名詞句が生起する位置を EPP 素性の照合に依らず、名詞句内部に Focus Phrase を仮定し、そこに位置すると論じた。「５．主な発表論文等」の関連する雑誌論文の番号は[5]である。

(b) 随伴移動の分析において、移動する名詞句、前置詞句、副詞句など内部の構造分析をサバイブ・ミニマリズムの枠組みで行った。また、Grimshaw (2000)の示唆を援用して、併合の適用時に未照合素性が投射すると提案し、関連する事例を説明した。「５．主な発表論文等」の関連する雑誌論文の番号は[2]である。

(c) notwithstanding や during が主要部となる前置詞句を通時的な研究を通して、その左右に節構造に対応する構造位置（主語位置、目的語位置）があると提案した。これらの前置詞は非対格動詞としての性質を担うために、その右側の要素が左側へ移動する派生が歴史的に見受けられると論じた。前置詞句の左右周辺部についてはさらに詳細な分析が可能であるが、その基盤となる研究を提示した。「５．主な発表論文等」の関連する雑誌論文の番号は[7], [10]である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）

[1]北峯裕士 (2014)「副詞類効果」『甲南英文学』29, pp. 1-18, 甲南英文学会.［査読有］

[2]Fukuda, Minoru (福田稔) (2015) “Pied-piping in survive-minimalism,”『英文学研究』支部統合号 7, 日本英文学会 2015 年 1 月, pp. 347-359. ［査読無］

[3]Fukuda, Minoru (福田稔) (2016) “A Survive-minimalist Approach to the Japanese Right Periphery: The Case of Modals,”『甲南英文学』31, 甲南英文学会 2016 年 9 月, pp. 47-75.［査読有］

[4]古川武史 (2016)「名詞句からの外置とラベルシステム」『甲南英文学会』31, pp. 77-93, 甲

南英文学会.［査読有］
[5]Fukuda, Minoru（福田稔）(2016) “On DP-internal Information Structure in Genealogically Unrelated Languages, with Special Attention to Kumamoto Japanese,” LESEWA 2016, モスクワ大学, 2016 年 11 月, pp. 5-8.［査読有］
[6]Nakamura, Koichiro（中村浩一郎）(2017) “Japanese Particle Wa with a Focal Stress Provokes Exhaustive Identificational Focus,” Studies in Syntactic Cartography, pp. 352-370, China Social Sciences Press. ［査読有］
[7]福田稔 (2017)「前置詞 notwithstanding について」『〈不思議〉に満ちたことばの世界（下）』開拓社 2017 年 3 月 pp. 131-135.［査読無］
[8]福田稔 (2018)「抜き出しを許す付加詞について」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 25 巻第 1 号, pp. 133-152. ［査読無］
[9]Fukuda, Minoru (福田稔) (2018) “Upward Inheritance of Phasehood,” 『ことばを編む』西岡宣明・他 編集, pp. 113-124, 開拓社. ［査読無］
[10]Fukuda, Minoru (福田稔) (2018) “On the Historical Development of During,” 『宮崎公立大学人文学部紀要』第 25 巻第 1 号 2018 年 3 月 pp. 123-132.［査読無］

〔学会発表〕（計２０件）
[1]中村浩一郎 (2014) 「『が』格名詞句の意味用法と統語構造について: 網羅的識別的焦点化解釈に関する一考察」福岡言語学会, 2014 年度第 1 回例会　九州大学, 2014 年 4 月 26 日.
[2]Nakamura, Koichiro（中村浩一郎）(2014) “vP internal Topic-focus articulation in Japanese,” The 16th Seoul International Conference on Generative Grammar (SICOGG 16), Dongguk University, Seoul, South Korea, August 7, 2014.
[3]福田稔 (2014)「抜き出しを許す付加詞について」日本英文学会九州支部第 67 回大会, 英語学部門シンポジウム「動詞句の統語構造」福岡女子大学, 2014 年 10 月 25 日.
[4]中村浩一郎(2014) 「vP 内部のトピック・フォーカス構造について 」日本英文学会九州支部第 67 回大会, 英語学部門シンポジウム「動詞句の統語構造」福岡女子大学, 2014 年 10 月 25 日.
[5]福田稔 (2015) 「英語の後置詞について」甲南英文学会第 31 回大会, ワークショップ「周辺構造を巡って」2015 年 7 月 11 日, 甲南大学.
[6]古川武史 (2015) 「名詞句からの外置とラベルシステム」甲南英文学会第 31 回大会, ワークショップ「周辺構造を巡って」甲南大学, 2015 年 7 月 11 日.
[7]北峯裕士 (2015)「談話連結された wh 句の優位性効果の欠如について」甲南英文学会第 31 回大会, ワークショップ「周辺構造を巡って」甲南大学, 2015 年 7 月 11 日.
[8]中村浩一郎 (2015)「英語補文内の Topic-Focus 構造について」甲南英文学会第 31 回大会, ワークショップ「周辺構造を巡って」甲南大学, 2015 年 7 月 11 日.
[9]Nakamura, Koichiro（中村浩一郎）(2015) “Japanese DP scrambling with a focally stressed particle provokes exhaustive identificational focus interpretation,” 3rd Graz Workshop on Information Structure (GWIS 3), University of Graz, September 26, 2015.
[10]古川武史 (2015)「名詞句からの外置とラベルシステム」日本英文学会九州支部第 68 回大会, 英語学部門シンポジウム「最新文法理論の射程」佐賀大学, 2015 年 10 月 24 日.
[11]Nakamura, Koichiro（中村浩一郎）(2015) “Scrambling of objects marked with focally stressed denotes exhaustive identificational focusLinguistics,” Beyond and Within 2015 (LingBaw 2015), John Paul II Catholic University of Lublin, October 22, 2015.
[12]Nakamura, Koichiro（中村浩一郎）(2015) “Japanese particle wa with a focal stress provokes exhaustive identificational focus,” International Workshop on Syntactic Cartography 2015, Beijing Language and Culture University, December 6, 2015.
[13]Nakamura, Koichiro（中村浩一郎）(2016) “Correlations of Focus Types, Focal Stress, and Structural Position,”9th Days of Swiss Linguistics (9th DSL), University of Geneva, June 29, 2016.
[14]Nakamura, Koichiro（中村浩一郎）(2016) “Exhaustiveness and contrast in focused elements and their structural positions,”49th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (SLE 2016), University of Naples Federico II, September 2, 2016.
[15]古川武史 (2016)「最簡潔併合と名詞句からの外置」甲南英文学会第 32 回大会, 甲南大学, 2016 年 9 月 17 日.
[16]Fukuda, Minoru（福田稔）(2016) “On DP-internal Information Structure in Genealogically Unrelated Languages, with Special Attention to Kumamoto Japanese,” International Conference on Languages of Far East, Southeast Asia and West Africa, M. V. Lomonosov Moscow State University, November 16, 2016.
[17]Fukuda, Minoru (福田稔) (2016) “Label and Projection,” The 7th International Conference on Formal Linguistics (ICFL-7), Nankai University, Tianjin, China, December 2-4, 2016.
[18]Nakamura, Koichiro（中村浩一郎）(2017) “Exhaustiveness, contrast, and focal stress in topic and focus elements and their structural positions,” Non-At-Issue Meaning and Information Structure (NAIS), held at University of Oslo, May 8, 2017.
[19]Nakamura, Koichiro（中村浩一郎）(2017) “Another argument for the differences among

wa-marked phrases,”2nd International Workshop on Syntactic Cartography (IWSC), Beijing Language and Culture University, October 28, 2017.
[20]福田稔 (2018)「前置詞句の周辺部について」熊本言語研究フォーラム「ことばを探る最前線」, ＫＫＲホテル熊本, 2018 年 3 月 17 日.

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ
http://leftperiphery.blog.fc2.com/

大会プロシーディング（計　５件）
[1]福田稔 (2014)「サバイブ・ミニマリズムにおける島の効果について」『第 86 回大会 Proceedings (付 2013 年度支部大会 Proceedings)』, pp. 307-308, 日本英文学会.
[2]Nakamura, Koichiro (中村浩一郎) (2014) “vP internal Topic-focus articulation in Japanese,” Park, Jong Un and Il-Jae Lee eds., Proceedings of 16th Seoul International Conference on Generative Grammar, pp. 299-309, The Korean Generative Grammar Circle.
[3]福田稔 (2015)「抜き出しを許す付加詞について」『第 87 回大会 Proceedings (付 2014 年度支部大会 Proceedings)』, pp.314-315, 日本英文学会.
[4]中村浩一郎 (2015)「vP 内部のトピック・フォーカス構造について」『第 87 回大会 Proceedings (付 2014 年度支部大会 Proceedings)』, pp. 316-317, 日本英文学会.
[5]古川武史 (2016)「名詞句からの外置とラベルシステム」『第 88 回大会 Proceedings (付 2015 年度支部大会 Proceedings)』pp. 314-315, 日本英文学会.

６．研究組織
(1)研究代表者
福田 稔（MINORU FUKUDA）
宮崎公立大学・人文学部・教授
研究者番号：00228917

(2)研究分担者
古川 武史（TAKESHI FURUKAWA）
福岡工業大学・社会環境学部・教授
研究者番号：80238667
中村浩一郎（KOICHIRO NAKAMURA）
名桜大学・国際学群・教授
研究者番号：50279064
北峯 裕士（YUJI KITAMINE）
（死去のため平成 29 年 3 月 21 日削除）
北九州市立大学・外国語学部・教授
研究者番号：30234272

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし